

ノアの子らの系図

—聖書の中の世界—

大 住 雄 一

聖書の物語以外のすべての場面も出来事も秩序も、この〔聖書の〕世界から独立して存在する権利を持たず、それらのすべて、すなわち全人類の歴史は、この枠内でこそ真の秩序を与えられるし、また、これに従属させられるように約束されている、というわけである。

E・アウエルバッハ『ミメシス』¹⁾

〔1〕 諸国民表（創世記 10 章）の構成

（1） 諸国民表の諸問題

「またこれらは系図（トーレドート）である、ノアの子ら、セム、ハム、そしてヤフェトの」といういわゆるトーレドート定式で始まる創世記 10 章は、一般に「諸国民表（die Völkertafel, the table of nations）」と呼ばれ、世界の（もちろん聖書の世界から見えるかぎりの）諸国民を、すべて洪水ののちノアから出た子孫として数え上げたものとされている。しかしそのテキストは矛盾が多く、内容的・形態的に一貫性を欠くと見え、配列や区分の意味が分からなくて、古くから註解者を悩ませてきた。

第一に 11 章 1-9 節にある「バベルの塔」の物語との関係が問題となる²⁾。すでに 10 章において、諸国民が「語族(ラーション)……に従って分かれた」(10: 5, 20 節, 31 節をも参照) と言われているのに、11 章 1 節では改めて、「全地は単一の言語 (サーファー) 同じ言葉 (デバーリーム) であった」と述べてい

る。また11章9節において、塔の事件の結果、町がバベルと呼ばれるようになったと言われているのに、この名は、すでにニムロドの王国の町の名として挙がっている(10:10)³⁾。もともと10章25節に、土地が分けられたのはペレグの時代であるという注釈が加えられている。ペレグはアルパクシャドの曾孫であって、セムから数えると五代目である。おそらくバベルの塔との時間的な関係を説明するために、わざわざそこまで世代を下ろしたのである⁴⁾。

第二に、10章の系図は「産めよ、増えよ、地に満ちよ」(9:1)という祝福の成就に見えるが⁵⁾、バベルの塔の物語では、人々が全地に散らされていくのは罰としてである。この点は、むしろ、ハムの行いによるノアのカナンに対する呪い(9:20-29)との関連でこそ問題となるのだが、10章の系図は9章とはどのような関係にあるのか、あるいは10章は9章と関わりのないリストであって、カナンに対する呪いを前提としないということなのであろうか。

第三に、カナンの呪いとの関係も含めて、諸国民の区分の原理は何かということである。やはり一番大きな問題になるのは、ハムの子孫である⁶⁾。本来セム族であるカナンが、なぜハムの子孫として数えられているのか(15-19節)。すでにノアが、ハムの行いのゆえにカナンを呪ったのであるが、それだからと言って、もちろん、カナンの諸氏族がハムに含まれている系図が直ちにノアの呪いのテキストを前提としていると言うことはできないであろう。しかし、ノアの呪いそれ自体にしても、なぜカナンはハムの子であるのか。また、カナンの子孫と、同じハムの子であるエジプトの子孫についてだけは、民族ないし部族の名が個人名によってでなく、「～人」という民族・部族名で呼ばれている(13-4節のエジプトの子孫は「イーム ym」という語尾で表す複数形によって、16-18節のカナンの子らは「イー y」という語尾を持つことによって)。またペリシテ人とカフトル人が、地中海の人々なのに、なぜヤフェトの子でなく、ハムの、しかもエジプトの子孫であるのか(14節)。さらにシンアル(メソポタミア)の王ニムロドが、なぜハム族クシュ(エジプト南方の黒人、エレミヤ書13:23参照)の子孫なのか(6-12節)。ここに「クシュ」と呼ばれる民族は、南方の黒人ではなくメソポタミア北部の山地から出た「カッシート」であると

いう見解もあるが⁷⁾、カッシートならカッシートで、それがハムの子孫に数えられていることが、奇異なのである。しかも、ニムロドについての記述は、系図の中でこれだけが名の羅列でなく、人物像の描写であり、その領土にある都市名が挙げられているのも特別である。

第四に、諸国民の区分の原理と関連するが、なぜヤフェトが最初に数えられるのか⁸⁾。セムが最後であるのは、イスラエルがセムの子孫であって、後の物語（まずは11章10節以下）につながっていくものであるからかもしれない。それならヤフェトは、長男であるセムが最後に来る系図だから、末の子として最初に来たのであろうか。ところが9章24節では、ハムを「小さい息子」と呼んでいる。それは、新共同訳がそう理解したように、「末の」子であるのか、あるいはセムまたはヤフェトに対して「下の」子であるのか。いずれにせよ、きょうだいの呼び方は「セム、ハム、ヤフェト」であって、「セム、ヤフェト、ハム」でも「ヤフェト、ハム、セム」でもないのである⁹⁾。

(2) 文献批判による諸国民表の矛盾解決の試み

前節(1)で指摘した創世記10章のテキストの不統一または矛盾と見える諸問題については、当然、それらの現象が認識されると同時に解決の試みも提案されてきた¹⁰⁾。しかしその中で近代の資料仮説が、最も包括的な解決を示すものとして、今日まで支配的な影響力を持っている。それはつまり、矛盾はテキストを構成する複数の資料の間にある齟齬であって、諸資料の混合によって二次的に生じたものだと説明する。

インタープリターズ・バイブルのC・A・シンプソンによる解釈を¹¹⁾、資料仮説に基づく解釈の代表例として、上記の問題提起に即して整理してみよう。いわゆる原初史（創世記1-11章）は、一般に祭司文書（P）と、それよりも古いヤーヴィスト（J）の混合体とされるわけであるが、シンプソンはJを更に二つの資料層（J1, J2）に分ける仮説に従う。

11章1-9節のバベルの塔の物語はJ1のもので、アブラハムからその物語が始まるイスラエルを、あちらこちらに分かれた民の一つとして位置づけようと

するものだと言う。後述するように、シンプソンによれば、10章の諸国民表の枠組はJ2のものである。J1はこの枠組を知らず、バベルの塔の結果初めて人々は分かれていくと考えていた。他方、諸国民表の枠組を手にしていたJ2にとってバベルの塔は、諸国民が分かれていった原因譚としては必要がなく、ただ、話として保存されたのだと言う。

9章21-25節（彼の理解では、テキスト単元は20節から始まるのではないし、26-29節も別の話である）は、J1が、遊牧民イスラエルの定着する過程から伝わった物語にノアの名を付して、ノア物語のひとこまとして取り込んだものと見る。26-27節は二次的な拡張テキスト、28-29節はPに帰せられている。セム、ハム、ヤフェトというノアの子らの順序は、祭司的編集者のものであって（6:10, 9:18参照）、Jにおいてはセム、ヤフェト、カナンであった（23-24節）。祭司的編集者は、22節の「カナン」の名に「の父ハム」という語を付け加えて、祭司的系図との調整をはかったと言う。これらによって、「本来」、呪いはカナンに対するものであり、ハムと呪いは関係がないことになる。

さて、そこで10章の諸国民表は、祭司的編集者がPの素材とJ2の素材（いずれも付加や改編を経ている）を合成したものとされる。Pに属するのはセム、ハム、ヤフェトそれぞれの子らの名の列挙と、「これらが～の子らである」という枠組であり、J2から受け継いだ諸国民表を新しい枠組の中に置くものとなったと言う。すなわち次のような枠組である。

1節前半 トーレドート定式「またこれらはトーレドートである、ノアの子ら、セム、ハム、そしてヤフェトの」

2-4節 リスト：ヤフェトの子ら

5節 枠「これらから海沿いの諸国民は彼らの地に分かれた。それぞれ彼らの語族に従い、彼らの氏族に従い、彼らの国民によって。」

6-7節 リスト：ハムの子ら

20節 枠「これらはハムの子らである。彼らの氏族に従い、彼らの語族に従い、彼らの地によって、彼らの国民によって。」

22-23節 リスト：セムの子ら

31-32 節 枠「これらはセムの子らである。彼らの氏族に従い、彼らの語族に従い、彼らの地によって、彼らの国民によって。」

枠「これらはノアの子らの諸氏族である。彼らの系図に従って、彼らの地によって、またこれらから地の諸国民は分かれた、洪水の後。」

Pだけ独立させて考えれば、クシュ（6 節）はハムの子であっても、ニムロドの親ではない。

シンプソンによれば、Jの基本的な形は次のようである。「またカナンは、長男シドンとヘトを産んだ（15 節）。そしてヤフェト、カナンの兄にもクシュとエジプトが（6 節）生まれた。またクシュはニムロドを産んだ。かれは地上で初めての勇士となった（8 節）。彼の王国の初めはバベルであった（10 節）。またセム、ヤフェトの兄にもエベルが生まれた（21 節）。そしてエベルに二人の子らが生まれた。ひとりの名はペレグ、彼の時に地が分けられたので。彼の兄弟の名はヨクタン（25 節）」。

つまり、物語的なテキストはJであったことになる。そしてクシュ、エジプト、ニムロドはヤフェトの子である！

(3) 資料仮説の問題点

インタープリターズ・バイブルに代表される資料仮説による解釈は、諸国民の分化をバベルの塔に現れた傲慢の結果と見る文書資料と、そうでない文書資料とがあったと考える。また、塔の建設と言語の混乱を都市名の原因譚とし、ニムロドを最初の専制君主とする資料と、そのニムロドの支配領域の中にバビロンを加える資料とを区別する。こうして、10 章で既に言語などによって分かれていると見える諸国民が、11 章の初めでは、まだ言語において一つであったと言われているといった矛盾、また同じように塔の建設による言語の混乱を都市名の原因としたその町が、10 章に既にその名で登場する矛盾は、ことの起源に関して互いに見方の違う二つの話を、あたかも時を追って起こったように並べたために生じた矛盾であると説明することになる。

もっとも一つの歴史的事象にはさまざまな側面があり、事象をどのような事柄として理解するかについては、いろいろな見方がある。それで、地上にいる

いろな言語があり、諸国民がそれぞれ分かれて住んでいることについても、その原因や意味の理解は多様である。そうした様々な意味を、それぞれ違う物語で表そうとし、それらの物語を併置することは、ありうるだろう。資料の違いを言うまでもないことかもしれない。しかし、一つの事柄について別の物語があれば、資料も別であると考えるのが、資料仮説である。

ノアの子ラセム、ハム、ヤフェトの順番が一定しておらず、さらに呪われたのはハムなのかカナンなのか、なぜカナンが呪われなければならないのかということについては、ノアの子らの名とその順序について、複数の伝承があって、それらが合成されたために混乱が生じているのだと言う。

このようにして、たしかに(1)で挙げた問題のかなりの部分が解決するように見える。しかし、なぜカナンやペリシテ人がハムの子であるのか、なぜニムロドがクシュの子であるのかという問題は、不可解のまま残る。これとは違う資料区分をする研究者もあるが、これらの問題を残りなく解決しようとするれば、際限なく資料を細分していくほかはない。さらに、ハムの子らであるカナンの子孫とエジプトの子孫について、民族ないし部族の名が個人名によってでなく、民族・部族名で呼ばれている理由も、明らかにならない。こうした民族・部族がなぜハムの子らとされているのかという、区分の根本問題が、結局解決されていないのである。そして、なぜヤフェトが一番先なのかという配列の問題も、答えを見いだしていない。

しかも、こうした資料仮説は、一貫性のないテキストを価値の低いものと見ているわけで、それぞれは統一がとれていたはずである文書資料の混合の結果が今のテキストであるならば、今のテキストよりも、そこに組み込まれている個々の文書資料にこそ意味があるということになる。しかしそれなら、現在のテキストは、編集者の意図を反映しない「混合体」に過ぎないのだろうか。現在のテキストの配列や用語法や文体には、諸資料がそれぞれ持つ「意味」を超える独自のものはないのである。

最近の註解者のほとんどは、今日のテキストを構成する文書資料の存在は認めつつ、最終編集者の意図を重視する。これまで、一貫性がなく、見通すこと

ができないと考えられてきた諸国民の区分や配列について、また異なる文体の併存について、むしろ意図的に行われたものとして、解釈し直そうとしているのである¹²⁾。

[2] 社会文化的／社会経済的意味

(1) 遊牧生活者と定住者

最近の諸国民表解釈において、一致点となってきたのは、このリストが諸国民の民族的なあるいは言語的血縁的地縁的な関係を示すものではなく、社会文化的ないしは社会経済的意味を表すものだという点である。

ハイファ大学の研究者B・オデドは、創世記10章には様々な二次的要素が付加されたために、テキストが一貫性を欠くものになっていることを認める。しかし、その核となった諸国民表がもともと存在したと考える。そして元の諸国民表は、世界の人々を三つに分けた構成であり、その区分にはっきりした原則があり、その原則は社会文化的／社会経済的アプローチを反映していると主張する¹³⁾。

世界を三分構成とし、その区分にははっきりした原則があり、その原則が社会文化的／社会経済的アプローチを反映しているような原テキストの想定は、創世記4章20-2節、レメクの子らのリストとの類比によって、確認される。レメクの子らは、ヤバル、ユバル、トバル・カインの三人で、その三人を区別するものは、職業である。そして、「(すべて) ~するものらの父」という定型句によって、それぞれの文化の創始者とされている¹⁴⁾。

創世記10章は、セム、ハム、ヤフェトを逆順序に並べた三分構成であるが、セムの系図については、「すべてのエベルの子らの父」という定型的な規定によって(21節)、ヤバル、ユバル、トバル・カインと同様の、社会文化的／社会経済的特徴をもったグループのリストであることが示されている¹⁵⁾。

エベルがハビルないしアピルとどのような関係にあるかは、別の検討を要するけれども、少なくとも「アーバル」という動詞に通じ、「渡り歩く人たち」す

なわち遊牧民である。本来地理的民族的な名称であったのが、特定の生活様式を持つグループの呼称となることは、しばしばあると言う。カナン人が商人を表すようになったのと同様、エベルの子らがノマドを表すようになったと考えられる。21節、25節に挙げられたエベルの子らの名の大部分は、シリア・アラビア砂漠やパレスティナ周辺部の部族名である。もともと創世記10章のエベルは、ノマドと言っても様々なタイプを含んでいる¹⁶⁾。

創世記4章では、ヤバルが「全て天幕に住む者と家畜を飼う者の先祖」とされるが、アッカド語で「天幕に住む者」とは、砂漠や定住地周辺に住むノマドないしは家畜飼育者を指す。そこで、用語法や構造や、区分の原則から見て、諸国民表の原テキストと4章20-22節は、極めて近いところにあると言わねばならないと、オデドは考えている¹⁷⁾。

セムがノマドの父であるとすれば、ハムは、それとは反対の社会文化的形態を代表する。すなわち農村、町や都市の定住者たちであり、王国の枠組の中に組織されている人たちである。オデドは、1) セムとハムが反目と憎悪の関係にあり、2) ノマドと定住者の間には伝統的に対立があり、3) ハムの系図に特殊な項目があることから、ハムの系図が定住者のリストであることが、蓋然性をもって言えるとする。

まず1) ハム（カナンの父）に対するノアの呪いに現れた、物語作者の、カナンの父に対する憎悪とヤフェトへの親近感を読み取ることができる。そして2) ノマドと定住者の対立関係については、歴史学や人類学の立場から、数えきれないほどの研究がある。聖書のテキストの中でその対立構造を示すものは、たとえば農耕者であるカインと牧羊者であるアベルの対比であると言う。4章12節でカインへの呪いとして「お前は地上をさまよい、さすらう者となる」と言われているのは、定住者がノマドをそのように見ているのだと考えている。このような対比は、聖書にも聖書外の資料にも、多く見いだされる。もちろん、対立だけでなく、共存のモチーフもある。

さらに3) ハムの系図には、都市や王国の名が並べられていることである。セムが部族的なあり方であるのに対して、ハムは王国的なあり方である。リス

トには、北にメソポタミアのバビロニア王国と大きな町々、南にエジプトとクシュの王国を挙げ、またカナンの住民は、都市住民であり、都市国家を形成する（申命記1：28）。そしてカナンは農耕地である（申命記6：10-11）¹⁸⁾。

最後にヤフェトは、直訳すれば、「諸国民のすべての島々（海沿いの地）の父」（5節）であって、船でそこに達するような地（の住民）を指す¹⁹⁾。

(2) 社会文化的／社会経済的意味 残された問題

さて、オデドが試みたような諸国民表の社会文化的／社会経済的理解によって、なぜカナンやペリシテ人がハムの子であるのか、なぜニムロドがハムの子であるのかという問題が、一つの解決を得たと言えるだろう。カナンやニムロドの王国は、都市をその枠内に組織する王国、あるいは都市国家なのである。ニムロドがクシュの子であることは、ここでも直接答えられていないし、難しい問題であるが、ニムロドはなぜハムの子かという根本問題が、彼は王国の支配者であり定住的あり方を表すからだということによって解決するのであれば、「クシュ」をエジプト南方の黒人ではなくメソポタミヤの「カッシート」と見て地理的問題を解消する説にも、意味が出てくる。もっとも、南のクシュに北のバビロニアが、大王国を構えるという同じあり方を代表するものとして対置されているのであって、クシュがニムロドを産んだという記事は、それ以上の地理的民族的関係を言っていないと見ることもできよう。

ペリシテがエジプトの子であることについても答えがないが、ペリシテはイスラエルから見て西に位置し、エジプトに深く侵入していた。そして彼らはたしかに海洋民族であるが、カナンにおける存在形態は、アシュドド、ガザ、アシュケロン、ガト、エクロンという「ペリシテ人の町」（たとえばサムエル記上6：17）から知られているように、まさに都市国家であった²⁰⁾。

カナンの子孫とエジプトの子孫が民族・部族名で呼ばれている理由は、なお明らかではない。エジプトに属する諸民族について、ルド人（13節では複数形の民族名、22節では単数形の個人名）は、この諸国民表の並行記事に当たる歴代志上1章11節、17節を除けば、イザヤ書66章19節、エゼキエル書27章10

節, 30章5節, エレミヤ書46章9節に登場するが, 複数形の民族名で登場するのはエレミヤ書46章9節だけである。アナミム, レハビム, ナフトヒム, カスルヒムはここと歴代志上1章11-12節にのみ現れる。カフトルは, エレミヤ書47章4節やアモス書9章7節ではペリシテ人の発生地とされるが(申命記2章23節も参照), 民族名として登場するのは, ここと歴代志上1章12節と申命記2章23節だけである。パトロー(上エジプト)という地域名はエレミヤ書44章1節, 15節, エゼキエル書29章14節, 30章14節, イザヤ書11章11節にも登場するが, 複数形の民族名としては, ここと歴代志上1章12節だけである。いずれにせよ, ここに列挙された諸民族は, これらの呼び方で, 捕囚期よりも後の世界像にのみ含まれるものようである²¹⁾。

カナンの子らについては, 民族・部族名(yを語尾に付ける形)で呼ぶのが, イスラエルにおいて普通であったとしか言いようがないかも知れない。ただ, 一般にカナンの先住民のリストとしては, 「カナン人, ヘト人, アモリ人, ペリジ人, ヒビ人, エブス人」(出エジプト記3:8, 17その他)が列挙される。並び方が変わったり, ある民族名を欠くものがあったり, 「ギルガシ人」が加わったり(申命記7:1)といったヴァリエーションはあるが, おおよそこれが定型であると言ってよい。創世記10章15-16節には, 「カナンの子ら」として「ヘト」そして「エブス人, アモリ人, ギルガシ人, ヒビ人」が挙げられている。その他の, yを語尾に付ける形でこの箇所が登場するアルキ人, シニ人, アルワド人(エゼキエル書27:8, 11参照), ツェマリ人は(そしてハマトも民族名としては), ここと歴代志上1章15-16節にのみ現れる。これに対して, 先住民のリストにはyを語尾に付けた形で言及されるヘトが, ここでは個人名として現れ, それと並べられるシドンは, 士師記3章3節において他の先住民と並べられて, またエゼキエル書32章30節に北方の民族として, いずれも語尾yを付して現れている。

いわゆる先住民リストには見られないがここに言及されている諸民族は, だいたいシリア, フェニキアの諸都市で, イスラエルとの通商関係があるものだとされる。ところが, 民族名としては聖書中諸国民表以外には見られない,

いわばここに列挙することだけに意味がある名である。つまりカナンの子らのリストには、イスラエルが放逐するよう命じられた先住民のリストと、商人としてのカナン人のリストが併存している。しかもおそらく後者は、諸国民表が一つの完結した世界像を提供するものであるゆえ²²⁾、カナンの子らの中にイスラエルと対立する先住民だけでなく、対立関係にない（聖書では問題にならない）民族をも包み込むために、わざわざ導入されたと考えられる。そうになると、セム、ハム、ヤフェトの系図は、たしかに諸国民の社会文化的ありかたをもって区分し、そのようなものとしての包括性を目指しているようであるが、核の部分には、むしろ、それとは異なる意図を持ったリストがあると言うべきではなかろうか。

ところで、オデドは諸国民表が社会文化的／社会経済的意味を持つということを明らかにするために、諸国民表の原テキストと同じ構造を持つものとして創世記4章20-22節を挙げている。カインとアベルの話がノマド的あり方と農耕民的なあり方の対比を示しているというのは、おそらくその通りであり、カインが放浪者になったのが呪いの結果であると見られているのも明らかである。また他方、最近の人類学ないし社会学においては、都市国家対農民という階級的対立関係よりも、農民および彼らを守る都市国家からなる定住民と、これに対立する放浪民という図式が提出されている²³⁾。しかし、ことは単純ではないのであって、同じ最近の人類学が、都市生活とノマド的生活の互換性を明らかにしてきているし²⁴⁾、創世記4章も、まさに放浪者カインが都市の創始者だと言っている（17節）。定住的あり方とノマド的あり方は、対照的に見えるものであっても、決して交換不可能なものとは言わなければならない。

つまり諸国民表は、一つの完結した世界を表そうとして、イスラエルとあまり関係のない民族・部族をも列挙し、その区分は社会文化的／社会経済的意味を反映した部分があるだろう。しかしノマドと定住者の対比は、区分の枠組としては流動的であって、単純に区別できるものではない。

[3] 聖書の中の「世界」

(1) 社会文化的／社会経済的意味別の読み方

さて、創世記4章との関係をもう少し考えてみよう。オデドは、諸国民表とレメクの子らのリストを今日の形の聖書文書の位置から外し、それぞれ独立の意味を持ちうるものと考えていて、その三分構成を、こうしたリストの構造の特徴として、それぞれ、ある世界の全体像をとらえるものと見ている。また彼によれば、レメクの子ヤバルが、セムの子らと同じノマド的生活形態の創始者とされていることが、レメクの子のリストと諸国民表の構造的類似を支える事実なのである²⁵⁾。しかしレメクの子らのリストには、諸国民表と構造を比較するだけでは見えてこない特有の位置づけと意味があり、それが、諸国民表の理解にも影響を及ぼす。

前節で、放浪者カインが都市生活の創始者とされていることに触れたが、それぞれ特定の文化の創始者であるレメクの三人の子らは、カインの子孫であり、彼らに帰せられる文化は、文化というものの全体を三つに分けたのではなく、実は、カインの子孫としての放浪集団によって担われた特殊な文化を三つ挙げたものであると考えられる²⁶⁾。オデドが諸国民表について言い、カインとアベルの間にも見いだすような²⁷⁾、ノマドと定住者の対比は、ここにはない。

まず、天幕に住んで羊を飼う遊牧は、放浪生活文化の代表であろう。琴や笛を奏する楽士たちは、今日も、またどこの国でもそうであるが、多くは「旅回りの芸人」である。それでは青銅や鉄を打つ鍛冶はどうか。鉄の精練技術を開発したのはヘト（ヒッタイト）人であった。ヘト人の故郷はいわゆる小アジアであるが、カナン地方の先住民に数えられ、またダビデの家臣の中にもいること（ヘト人ウリヤ）に現れているように、多くの移民が流出したと言われている。当然、鉄の精練技術をもって諸国を渡り歩いた技術者たちがいて、各地の王や貴族たちに召し抱えられ、武器などを製造したのである。

こうした放浪生活者は、社会においては下層の人たちであり、不法行為や暴

力に対して安全を保障されていない。レメクのうた（23-24節）において、彼らの父レメクが復讐の種としている「傷」や「打ち傷」は、杖や鞭で打たれた「打ち傷」や「みみず腫れ」と理解され、このうたは、法的保護のない下層民の安全保障を訴えているものにほかならない。もちろん主自らが七倍の復讐をもってカインの保護を約束する15節と共に読めば、この歌においてレメクが自ら復讐の手を上げることが正当化されるものでないと言うべきである。

創世記は、こうした特定の文化の担い手でありながら社会的には保護されない下層の人である放浪民を、カインへの主の呪いと保護の中を歩むものとして描く。そのようにして聖書テキストが、世界に存在する放浪民たちの生活の現実を解釈しているのである。

さらに、これら放浪民の起源を、ノアの家族以外は皆滅んだはずの洪水の前に置くのには、いかなる意味があるのか。おそらくここに登場する放浪民は、洪水の後にノアから出て全地に広がった諸国民の枠に入らない人たちなのである。逆に考えると、10章の諸国民表は、洪水後の世界を包括するリストであるというよりは、その中に入らない別枠の集団もある、もう少し限定されたリストだということになる。

(2) ノアの呪い

ところで、創世記5章のトーレドートによれば、ノアはレメクのもうひとりの子である（28-30節）。その29節は、レメクがその子の名をノア（慰め）と呼んで言ったこととして、「これは、主が呪われた土地から得る我らの働きと我らの手の苦勞とから我らを慰める」という、3章17節（J）の呪いに応答する言葉を提示する。このレメクの言葉は、Jのテキストが挿入されたものと考えられているが、そうであったとしても、われわれは資料分割で話の流れを断ち切ってしまうのではなく、今日あるテキストの流れを確認しなければならない。「土地から得る我らの働きと我らの手の苦勞」は農業を暗示している。放浪者に対置される生活様式としての農業が、やはり洪水前に示されている。諸国民表における定住者と遊牧民の対比の図式には、いよいよ注意が必要になる。

そして、主が土地を呪った（エールラー 'rnh）のに対して慰めとなるべきこのノアが、ハムの行いのゆえにカナンを呪うことになる。もともとノアは、自分自身から呪いを発したのではなく、アールール定式によって、カナンが呪いに値する（有罪である）ことを宣言したに過ぎない。「彼は言った。

呪われるべきものである（アールール 'rwr）、カナンは。

奴隷たちの奴隷になる、彼の兄弟たちに対して。彼は言った。
祝されるべきものである（バールーク brwk）、主、セムの神は。

カナンは彼（セム）²⁸⁾ に対して奴隷となれ。

神がヤフェトに対してところを拵げられるように（ヤフト）。

彼はセムの天幕に住む。

カナンは彼（セム）に対して奴隷となれ。」（9：25-27）

27 節最終行は、26 節最終行と同じ文であり、26 節と同様にその前の行の終わりにセムの名があるので、代名詞「彼」はヤフェトではなくセムを指すと考える。ここでは主が「セムの神」と呼ばれる。しかも呪われるべきカナンに対して、祝されるべきはセムではなく、セムの神、主である。

ノアがハムの行いについて呪いを宣告したのは、彼が父の裸を見、おもてで兄弟たちに告げたからであるが、おそらくそれは父に対する性的不義を暗示していよう。「父の裸を曝す」というのは、父の妻と寝ることである（レビ記 18：7-8, 20：11）。セムとヤフェトは父の裸を見ないように父の裸に「衣をまとわせる」が、「身にまとわせる衣の裾の四隅に房を着ける」（申命記 22：12）のは、「裾を曝さない」（申命記 23：1）ためであり、「父の裾を曝す」とは、父の妻を娶ることを言うのである（申命記 23：1）²⁹⁾。もしかすると、ハムのしたことが性的な不義であるゆえに、生まれた子が呪われたのかもしれない。ダビデがバトシェバに産ませた子が死んだように（サムエル記下 12：14 参照）。

ノアの呪いと関連で読むならば、諸国民表で注目されるべきものは、カナンであり、カナンはセムの神である主の前で呪われている。呪いの中身はセムの奴隷となることである。カナンの子らのリスト（創世記 10：15-18）は、前述の通り、社会文化的要素によって囲まれているとはいえ、先住民リストを含

んでいるのであり、イスラエルとの関係において意味づけられる。主は、民族学的あるいは社会文化的な意味でのセムの神ではなく、後にイスラエルとなる人々であるセムの神であり、カナンがセムの奴隷となるということは、諸国民表においては未だ存在していないイスラエルの奴隷になることなのである。

カナンの先住民がイスラエルの奴隷とされたことについては、ヨシュア記9章（ヒビ人）、士師記1章28節、30節、33節（カナン人）、35節（アモリ人）、列王紀上9章20-21節（アモリ人、ヘト人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人）などに記されている。聖書テキストの中に、カナンないしはハムが、セムの奴隷になったという記事はなく、また、ハムの子孫とされている人々で、カナンの子たち以外に、イスラエルの奴隷となった者はない。ただ、先住民としてのカナンの子らがイスラエルの奴隷とされたことによって、ノアの呪いは実現している。兄弟の奴隷とされる呪いは、ノアの言葉通り、カナンに限られている。

(3) ハムの子らとは何か

さてそれならば、カナン人はなぜハムの子とされているのであろうか。カナンに向けられた呪いがハムの所業に起因するものであり、またカナンが、民族学的にはセムに属するのにも、わざわざハムの子とされているならば、しかもその呪いが、おそらくハムの性的不義に関わるものであるとしたら、ハムの子らに共通する事柄は何であらうか。

父の裸を見、またおもてで語ったというのは、前述の通り、おそらく父の妻との性的関係を暗示している。しかしこれは、生物学的に、あるいは社会通念上許されないことであったから呪われたのではなく、もっぱら、律法がこれを禁じているものであるがゆえに、呪われたのである。

ある民族／部族の起源に、性的関係の問題が現れているのは、アブラハムの甥ロトの子たち、モアブとアンモンである（創世記19:30-38）。彼らは、ソドムとゴモラの滅亡の後（状況はノアの洪水に似ている）、残ったロトと彼の二人の娘の間に生まれたとされる。この物語は、モアブとアンモンを軽べつして、その生まれの異常さをあざけるように見えるが、むしろ、モアブとアンモンの

誕生が、肉親と交わってはならないという律法（レビ記 18:6, 17。これらの行為も「裸を曝す」こととして禁じられている）に反していると指摘しているのである。またロトの娘たちは、レビラートの要求（申命記 25:5-10）に従おうとしているようであるが、全く要件を満たしていない。これに対してユダの妻タマルは、おそらくカナン人であり（創世記 38:11）、姦淫と見られることを行ったにもかかわらず（創世記 38:24, レビ記 18:20, 20:10）、レビラートの要求を満たしたゆえに（創世記 38:8, 14）、ユダをして「わたしよりも彼女の方が正しい」（26節）と言わしめた。

その存在が律法に沿っているかどうか（イスラエルのように律法を保持しているかどうかではなく、結果的に合致しているかどうか）ということは、その民がそれぞれの土地に住んでいてよいかどうかにかかわってくる。申命記 9章4節は、イスラエルの面前から先住民が放逐されるのは、イスラエルの義によるのではなく、先住民の悪のゆえであると教える。もちろん律法を保持するイスラエル自身が約束の地に住み続けることができるかどうか、その可能性を律法の遵守の中に置いている（申命記 7:26, レビ記 26:27-43）。

性的関係の正しさを要求するレビ記 18章は、前節 [3] (2) 以来しばしば参照してきたが、その3節に次のように言っていることは、注目されてよい。「お前たちがそこに住んでいたエジプトの地のやり方のように、お前たちはおこなってはならない。また、私がお前たちをそこへ導き入れるカナンの地のやり方のように、お前たちはおこなってはならない。そして彼らの掟に、お前たちは歩んではならない」。この律法の言葉によれば、性的問題に関して、エジプトとカナンは、彼らの掟において、主の律法に反するのである。

さらにカナン人が、彼らの悪のゆえにその土地から放逐されるというのであれば、彼らは本来その土地にいる資格を自ら主張できないものという含意もあろう。これは、エジプトの子孫のなかに数えられているペリシテ人についても同様であろう。彼らは、本来カナンの地の人たちではない（アモス書 9:7）のに、そこにいるのである。

ニムロドをクシュの子にしてしまうのも、彼がクシュの子なら、本来そこに

いるはずのないものであるということかもしれない。ニムロドについてだけ物語的なテキストが付いているが、その趣旨は、二度繰り返される「主の前に勇敢な狩人」という呼び方に現れている。「主の前に」というのは、イスラエルにおいて称賛されているということよりも、むしろ、バベルの塔に通じるような、主の面前での傲慢があると読まれるべきではないだろうか³⁰⁾。

(4) ヤフェトの子ら まとめて代えて

最後に、なぜヤフェトが系図の初めに置かれているかということについて、考察する。まずヤフェトはイスラエルから遠い存在であって、それゆえ、忌避する必要のない人々であり（創世記9:27, またヨシュア記9:1-15をも参照）、これに対してハムは、地理的距離はともかく、イスラエルとの関係は近い人々であって、いろいろな意味で（大抵は対立者として）無視できない存在であったと考えられる。諸国民表は、遠いものから始めて最後にセムを置いたのである。しかし、その遠さには、忌避せずにすむという以上の意味があり、初めに置かれる積極的理由がある。

注目すべきは、ヤフェトの子らが、圧倒的に、裁きの日に関するテキスト、とくにエゼキエル書に登場することである。まず、ゴメルとマゴグは、黒海沿岸のスキタイ系住民とされるが、どこに位置したどのような民族か特定できない。そして、ここと歴代志の並行箇所つまり諸国民表以外には、エゼキエル書38章にしか出てこない（ゴメル38:6, マゴグ38:2, 39:6）。それは、終末論的な最終戦争において、地の果てから攻めてくる人々である。マダイ（メディア）は、ペルシャとバビロンに接して実在する国家であり、ヤワンはイオニア人と同定される。彼らはダニエル書にしばしば登場しても、終末論的なイメージにはならないが、ヤワンはイザヤ書66章19節において、タルシシュ、プル、ルド、トバルと共に、主の終末的栄光を見るべき遠くの島々として言及される。トバルとメシエクは、詩篇120篇5節にメシエクが、イザヤ書66章19節でトバルが他の民族とともに現れるが、それ以外は、諸国民表とエゼキエル書にしかなく、しかも必ず両者一組になっている（エゼキエル書27:13, 32:

26, 38:2, 3, 39:1)。ゴメルとマゴグがかかわる最終戦争に、この両者も登場する（エゼキエル書 38:2, 3, 39:1）。ティラスは諸国民表以外に言及されない³¹⁾。

次の世代にはゴメルの子らとヤワンの子らが挙げられているが、その内ではアシュケナズがエレミヤ書 51 章 27 節（それ以外には登場しない）において、バビロンを撃つ諸国民のうちに数えられる。トガルマはエゼキエル書 38 章 6 節に、タルシシュが、これはよく知られた地中海の民であるが、イザヤ書 66 章 19 節とエゼキエル書 38 章 13 節に現れる。なお、エリシャとキッティムはエゼキエル書 27 章 6 節, 7 節に並行して言及されている。リファトとドダニムは諸国民表以外に現れない。

つまり、ここでも諸国民表の完結性を確保するためにのみ挙げられている、ティラス、リファト、ドダニムといった民族名があるが、重要なのは、エゼキエルの指し示す終わりの日との関連であって、最も遠いという空間的關係は、時間的に一番先ということでもあり、終わりの時に最も遠いところから来る人たちが、一番先に現れた人々なのである。

このようにして、諸国民表は、聖書外の社会文化的／社会経済的枠組に当てはまる面があるが、むしろ基本的には、聖書そのものが持つ、律法に規定された土地所有の枠組、あるいは終末論的な時間の枠組によって構成されていると見ることができる。 (おおすみ・ゆういち)

注

- 1) アウエルバッハ, E (篠田一士・川村二郎訳)『ミメーシス ヨーロッパ文学における現実描写』(1946年)ちくま学芸文庫, 1994年, 上巻 37-38頁。
- 2) この点について手際のよい問題整理をしているのは, WENHAM, G. J., *Word Biblical Commentary 1, Genesis 1-15*, Waco TX, 1987, pp.242ff.
- 3) カルヴァン, J (渡辺信夫訳)『旧約聖書註解 創世記 I』(1563年)新教出版社, 1984年, 206頁は, すでにこの問題を論じ, 塔の話と前後入れ替わるのは, ヒュステロン・プロテロンかもしれないが, むしろプロレープシスだとしてい

る。

- 4) カルヴァン, 前掲書, 211頁。WENHAM, *op. cit.*, p.231.
- 5) カルヴァン, 前掲書, 203-204頁。SCHARBERT, J., *Genesis 111, Die neue Echter Bibel, Würzburg, S.102.*
- 6) CASSUTO, U. (Engl. tr. ABRAHAMS, I.), *A Commentary on the Book of Genesis Pt.2. From Noah to Abraham, Jerusalem, 1964, pp.201ff.*
- 7) SCHARBERT, a. a. O., S.106.
- 8) カルヴァン, 前掲書, 204頁。
- 9) その他の問題について, CASSUTO, *op.cit.* p.183.
- 10) カルヴァン, 前掲書, 各頁。CASSUTO, *op.cit. sub loco.* カーストへの批判は, ROBINSON, R. B., *Literary Functions of the Genealogies, CBQ 48 (1986), 595-608.*
- 11) SIMPSON, C. A., *Genesis. Introduction and Exegesis, The Interpreter's Bible Vol.1, New York / Nashville, 1952, pp.554-565.* シンプソンの資料分割についてはさらに同書 pp.185-200, 441-453 を参照。
- 12) WESTERMANN, C., *Genesis 1-11, BK. AT, Neukirchen, 1974, S.666.*
- 13) ODED, B., *The Table of Nations (Genesis 10) —A Socio-cultural Approach, ZAW 98 (1986), 14-31.*
- 14) ODED, *op. cit.*, pp.17-18.
- 15) ODED, *op.cit.*, pp.19-20.
- 16) ODED, *op.cit.*, pp.20-22.
- 17) ODED, *op.cit.*, pp.22-23.
- 18) ODED, *op.cit.*, pp.23ff.
- 19) ODED, *op.cit.*, p.29.
- 20) cf.: CASSUTO, *op.cit.*, p.208.
- 21) 各民族については, CASSUTO, *op.cit.*, *sub loco.* 彼は, しかし, 預言者のテキストを挙げながら, その意味づけをしていない。
- 22) ある完結性を求めたテキストであるということは, それぞれの区分に属する民族名が, 特定数挙げられていることから, 明らかになる。ヤフェトの子らが7人, 孫たちが7人, クシュの子らと孫たちが7人, エジプトの子らが7人(カルヒムから出たペリシテ人を除く), カナンの子らが全部で12人等々。そしてヤフェト14人, ハム30人, セム26人をたすと, 70人になる。こうした数の意味については, CASSUTO, *op.cit.*, pp.175-180.
- 23) LEMCHE, N. P., *Early Israel. Anthropological and Historical Studies on the*

Israelite Society before the Monarchy, VT. S 37, Leiden, 1985, p.431 and passim.

- 24) LEMCHE, *op. cit.*, p.431.
- 25) ODED, *op. cit.*, pp.16-17, 22-23.
- 26) 以下の議論は, OSUMI, Y., Brandmal für Brandmal. Ein Erwägung zum Talionsgesetz im Rahmen der Sklavenschutzbestimmungen, AJBI 18 (1992), 3-30, bes. S.17-21.
- 27) ODED, *op.cit.*, p.27.
- 28) cf. WENHAM, *op.cit.*, p.155.
- 29) OSUMI, Y., Deuteronomy, in: FARMER, W. R. et al. (eds.), *International Bible Commentary*, Colleagueville MN, 1998, *sub loco*.
- 30) カルヴァン, 前掲書, 205頁が, ニムロドの野心に触れているのは, 興味深い。
- 31) ここでもCASSUTO, *op.cit.*, *sub loco*.